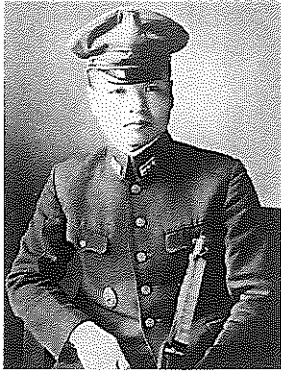


# 空の神兵と呼ばれた 父を偲んで

奥本 康大（陸士54家族会員）

昭和17年2月14日午前11時26分、インドネシア・パレンバン<sup>1</sup>の青い空に、突然約330個の純白の落下傘が開いた。日本陸軍挺進第2聯隊の奇襲作戦が展開された瞬間である。あれから75年の月日が流れた。この戦闘に参加したほとんどの方は既に旅立たれてしまった。当時の隊員の平均年齢は24歳だったと聞いているが、存命なら問もなく百歳を迎えるのだから仕方ないことである。



大尉時代の奥本實氏

じめ多くの資源が不足することが明白であり、南方地域の資源確保は日本の存亡に関わる最重要事項であった。

また欧米列強からアジア諸国を植民地から解放し大東亜共栄圏を築くためには、蘭印地帯には喉から手が出るほどの豊かな資源があった。開戦前から、欧米諸国との戦争を想定して、真つ先に攻撃するのはどこかも決めていた。

それがパレンバンだったことは言うまでもない。話を戻す。父たちを乗せた輸送機はパレンバン飛行場と製油所の二手に分かれて降下したが、敵防衛軍からの無数の高射砲弾が飛び交う中、勇猛果敢に輸送機から飛び出した。早く飛び出さなければ輸送機もろとも撃墜されてしまう危険性もあったはずである。まさに挺進そのものの方法だった。

この作戦で父は神がかり的な殊勲をあげた。敵の高射砲攻撃を避ける飛行をとつたので、鬱蒼としたジャングル地帯に降下。偶然行き会えた4名の部下と約30倍もの敵兵と2度におよぶ戦闘を繰り返して、これらの敵を壊滅し、飛行場占領に大きく貢献した。この功績により父は個人感状を授与され、畏れ多くも宮中に召され、昭和天皇に単独拝謁の榮譽を賜った。（昭和天皇実録）（昭和18年2月19日の項）。

このことが父の人生を大きく変えた。昔の軍人は克明に記録を残す習慣

をもっていたようだが、特に父は「筆まめ」で、多くの手記を遺していた。だが見つけたのは父が旅立った後である。遺品を整理して多くの「手書き」の手記を見つけたが、どうするかが長男である自分の仕事となった。父は昭和19年8月に落下傘部隊（挺進部隊）を離れ本土防衛軍（歩兵第97聯隊）に配置されたことで、戦前・戦中に用いた軍装品、陸士教科書、軍関係資料、写真、日記等は破棄することなく我が家に残った。昭和42年頃に、その大部分が陸上自衛隊富士学校資料館に出品展示されたが、写真や日記、手記のほとんどは我が家に保管され続けた。

父の死後、富士学校に展示されていた軍服・軍刀・陸士教科書等は全て寄贈させて頂いた（富士学校長から感謝状を頂戴した）。困ったのは、手書きの手記の行き先である。思い浮かんだのが、パレンバン奇襲作戦の実態について多くの書物に投稿されているジャーナリストの高山正之先生だった。自分も先生の著書をたくさん所有していた。高山先生なら父の手記を活用して頂けるのでは？と考え、先生にご判断を仰ぐことにした。ところが出版関係者から、思いもよらない先生と自分の共著案が出て、これに高山先生もご賛同され、考えてもみなかった自分も寄稿することになった。

戦後、父は戦友たちの慰霊祭に奔走する日々を過ごしていた。パレンバンのことは断片的なことしか語らず、自分とはほとんど知らない状態であり、父の死後に手記を読んで、初めて父の当時の「心中」を知ることができた。

出版が決まり、大慌てて父の手記を片っ端から読み直し、「百聞は一見に如かず」の格言に従い、急ぎよ、パレンバンに出掛けて父の足跡をたどった。パレンバン市は父が降り立った当時と違い、急速に発展しており、降下した場所はジャングルの面影など全くなく、住宅が立ち並び、またパレンバン市と飛行場を結ぶ一本道路も拡幅され、多くの車両が行き交う主要道路に変容を遂げていた。ただ、飛行場、製油所、パレンバン市庁舎、オランダ軍兵舎の一部は残っており、父の奮戦ぶりを偲ぶことができた。

このような経緯で昨年末、「なぜ大東亜戦争は起きたのか『空の神兵と呼ばれた男たち』を、瞬間に上梓できたのは、靖國神社に祀られている英霊の強い後押しがあったと信じている。この書籍を通し、国を守る為に勇気をもって戦った当時20歳代の若者たちの行動・心意気に触れて頂ければ幸いです。今回は「パレンバン戦闘編」だけを書物にしたが、機会があれば父が戦後の苦悩を綴った手記も何らかの形で紹介出来ればと願っている。